

2020年
7月18日(土)ー9月13日(日)

特別展

Special Exhibition
Urushi Extraordinaire
Lacquered Masterpieces
from the Tokugawa Art Museum Collection

漆

徳川美術館珠玉の名品



展覧会概要

日本・中国・朝鮮半島・東南アジアからインドあたりにかけて産出される漆の樹液を塗布した器物は、防湿性・防腐性に優れ、しかも酸やアルカリにも強い耐久性があります。また接着力も強く、東洋では古代からさまざまな工芸品や建造物などに用いられてきました。

世界的コレクションとして知られる徳川美術館の唐物漆器を中心に、器体に金や銀の粉を蒔き付けて繊細で美しい意匠を凝らした蒔絵、さらに朝鮮、琉球などの諸作品を通じて、現在のわれわれの生活の中で使用する機会が少なくなっている漆工芸の美しさと魅力をたどります。

展覧会基本情報

- ◆展覧会名 特別展 漆ー徳川美術館珠玉の名品ー
- ◆会場 徳川美術館 本館展示室
- ◆会期 2020年7月18日(土)ー9月13日(日) ※会期中一部展示替えがあります。
- ◆開館時間 午前10時ー午後5時(入館は午後4時30分まで)
- ◆休館日 月曜日(但し、8月10日(月・祝)は開館、翌11日(火)は休館)
- ◆観覧料 一般1,400円 高・大生700円 小・中生500円
※20名様以上の団体は一般1,200円 高大生600円 小中生400円
※毎週土曜日は高校生以下無料 ※企画展「怪々奇々ー鬼・妖怪・化け物…」との共通料金
- ◆主催 徳川美術館 名古屋市蓬左文庫 読売新聞社
- ◆協力 名古屋市交通局
- ◆同時期開催 企画展「怪々奇々ー鬼・妖怪・化け物…」 蓬左文庫展示室

プレス内覧会

2020年7月17日(金) 午後1時30分ー2時30分

会場：徳川美術館 講堂

内容：展覧会担当学芸員による概要説明の後、展示室にて自由取材

第一章 漆について

漆は、日本をはじめ中国・朝鮮半島・東南アジア、さらにインドあたりを原産とするウルシ科の樹木から採取された樹液で、これを塗布した器物は、防水性や防腐性、耐久性に優れていました。一旦乾固すれば接着力に勝り、さらに美しい光沢をもっています。

漆を用いた生活具は縄文時代の昔から用いられていたことが分かっており、その後も一万二千年の長い年月に亘って日本人の生活の中に息づいてきました。



左：黒塗葵紋付網代陣笠
竹を細く薄く削ったものを交差させて編んだ網代に和紙を貼り、その上から漆を塗ることで、漆の防水性を活用した例である。



右：朱塗秋草時絵碗 五十客の内
現在においても比較的身近に感じる膳碗類は、用途によって形状・文様・技法にも多様なバリエーションが見られる。本品は大人数での饗宴のために用意された、華やかでいて情趣あふれる椀。



上：井戸茶碗 岡谷家寄贈
漆の接着力は非常に強く、固まると強固で防水性に優れている。漆は陶器の修繕にも用いられ、金継ぎと呼ばれ、割れたり欠けたりした茶の湯道具も大切に扱われてきた。

左：短刀 朱銘 タヘマ 光室

朱漆で表に「タヘマ（＝当麻）」、裏に「光室」とあり、本阿弥光室により当麻と鑑定された記録が記されている。鑿彫や象嵌による銘とは別に、このように漆で鑑定書きすることもあった。



花と鳥の楽園
吉祥の花木

上：牡丹文堆黒盆
下：梔子連雀文堆朱盆 彫銘「張成造」「颯川東房」朱漆印
100回塗って3～4mmとなる漆の層を厚く塗り重ね、湧き上がるような彫刻を施す。両作品とも、元から明時代の伝世する彫漆器の内で、最も優れた作品の一つ。



明成祖(永楽帝)勅書
明の永楽帝から足利義満へ贈られた国書で、その中に堆朱の盆や香合が記されている。漆器が皇帝の贈答品として用いられていたことがわかる資料である。



狩獵図彫彩漆盆
2色以上の色漆を塗り重ね、効果的に文様を彫出した大変珍しい品である。彫目に現れる鮮やかな縞模様が特徴。

神秘的な渦巻き文様 ぐり 屈輪



屈輪文犀皮食籠・盆
屈輪は回転を表す「ぐりぐり」から起こった用語であり、今日では「GURI」という漆工用語として世界的に用いられている。



らでん 螺鈿
画題が未明な物語の場面を文様化したものを「楼閣人物」と呼ぶ。祝寿や昇進・多産・長寿といった吉祥を意図する例が多い。本品は分銅形・梅花形・桃形がセットで残る貴重な例。

左：黒漆地楼閣人物図螺鈿分銅形食籠
中：黒漆地楼閣人物図螺鈿梅花形食籠・盆
右：黒漆地楼閣人物図螺鈿桃形食籠



ろうかくじんぶつ 楼閣人物
一いにしえの物語一



箔絵 黒漆地龍文箔絵軸筆 銘 大明万暦年製
漆で文様を描き乾燥する前に金箔を貼っている。このような技法は東アジアの漆工芸に影響を与えた。

第二章 唐物漆器の魅力

鎌倉時代以降、日本には、中国や朝鮮半島から、漆器を含め、絵画や書、陶磁器、染織品などのいわゆる「唐物」が数多くもたらされました。

徳川美術館が所蔵する「唐物漆器」は一七九件にのぼります。世界的コレクションとして知られるこれらの作品を通して、漆器に施された文様の意図や、さまざまな技法を紹介します。

こうかりよくよう 紅花緑葉

牡丹尾長鳥文紅花緑葉硯箱
明時代に人気を博した技法だが、中国には殆ど残らず、現存する作例の大多数が日本への伝来品である。塗り重ねた朱と緑の漆の層を彫分けレリーフしている。断面から除く漆の層も美しい。



第三章 精緻の極み

朝鮮(高麗)の螺鈿

朝鮮半島における螺鈿は、中国の螺鈿の影響を受けつつ、これを凌駕するような高度な域にまで達していきました。その特徴は、驚くほどに細かく切った小さな貝片を組み合わせて文様を構成し、単線や綫線の金属線を併用している点、また時には一部に玳瑁(ウミガメの一種)を使用している点などが挙げられます。

中国・北宋時代の徽宗皇帝(一一〇八―一一三五)が高麗国に派遣した使者の見聞記には、高麗の螺鈿が極めて「精巧」かつ「細密」で優れているとその印象を書き残しています。



黒漆地文徴明書螺鈿風炉先屏風
二曲一隻の内 第一扇
明時代中期の著名な文人である文徴明(1470 - 1559)の七言絶句を厚貝の螺鈿であらわしている。



黒漆地菊唐草文螺鈿経箱

現存する高麗螺鈿の経箱8点のうち、最盛期の作とみられる。本来は『大蔵経』が納められていたはずだが、尾張徳川家では、伽羅や沈香などの香木を収納する箱として伝えられた。高麗時代の代表的経箱のひとつ。



第四章 琉球王朝の漆工芸

琉球漆器は、中国への朝貢や国家間の贈答品の他、琉球王家や士族の祭祀で用いる品や調度品として作られました。十五世紀に琉球王国が統一されると、王府への献上品、外交用の贈答品を製作する職人を監督するための貝摺奉行所が設置され、独特の琉球漆器をさらに発展させていきました。

琉球漆器の特徴は、加飾技法が多種多様なことにあります。沈金・箔絵・螺鈿・密陀絵・堆錦などの技法があり、時にはこれらを併用して製作されました。



上：重要文化財 朱漆地花鳥七宝
繫文密陀絵沈金大椀
下：朱漆地花鳥図漆絵密陀絵
箔絵折敷

第五章 日本の漆工芸

「時絵」

「時絵」は、漆を塗った器物の表面に、金や銀の金属粉を蒔いて図様や文字を描き、漆で定着させる日本独自の技法で、その源流は奈良時代にまで遡ります。時絵の主題には、和歌や『源氏物語』をはじめとする物語に取材した、日本人の情趣に根差す意匠が好まれました。

ここでは尾張徳川家に伝来した時絵の遺品を中心に、身の回りの生活を豊かに演出した時絵の品々を通して、日本人の美意識を辿っていただければと思います。



上：黒漆地染付磁器入花蝶時絵菓子簞笥
下：梨子地秋の野時絵手箱

徳川美術館だけに伝わる珠玉の逸品

世界中でただひとつ、優美な白い漆

1. 名称は「菊鷲文白密陀彫文庫」

「菊と鷲の文様がある白い密陀を彫った書籍などを入れる箱」という意味です。

2. 漆は何色が出せるの？

皆様がよく知る ■黒や ■赤の他に、■緑・■黄そして、漆本来の色である ■褐色の5色が可能です。白い顔料は漆と反応すると黒くなるため、白い漆を作ることは不可能とされています。

3. 密陀と白漆への憧れ

作品名にある「密陀」とは、顔料に植物油と乾燥剤の密陀僧(一酸化鉛)を混ぜた塗料です。通常は漆器の上に絵を描いて(密陀絵)装飾のために使いますが、この作品では赤い地塗りの上全体を白い密陀で厚くコーティングし、彫漆と同じように文様を彫り表しているため「白密陀彫」と命名されています。

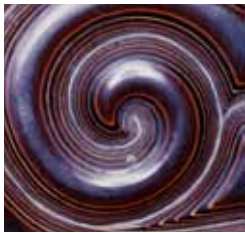
白密陀彫は大変珍しい技法で、確認できる限り現存する作品は世界中でこの作品ただひとつ！幻の「白い漆」への憧れが生み出した「堆白」とも呼ぶべき技法です。



菊鷲文白密陀彫文庫
明時代 15世紀

中国、朝鮮、琉球、そして日本 — 世界の名品が名古屋に残った奇跡。

徳川美術館で出会う珠玉の漆技法



くりに
屈輪
ハート形やメガネ・唐草・鉤型などをした中国独自に発展した文様。ぐりぐりした様から名付けられた。



ちようさいしつ
彫彩漆
朱・黒・黄・緑などの色漆から2色以上を塗り重ね、効果的に色の層を見せる手法。



こうかりよくよう
紅花緑葉
赤と緑の漆を交互に厚く重ね、深さを変えて彫ることで花鳥は赤、葉を緑で表現する。



うきほり
浮彫
白蝶貝や夜光貝などの厚い貝を立体的に彫刻して用いる。



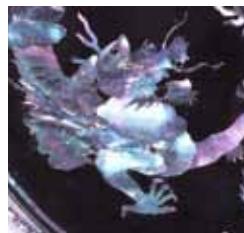
つuishu ついこく
堆朱・堆黒
彫漆の一種。表面に赤が現れるように彫ると堆朱、黒が現れるように彫ると堆黒と呼ばれる。



わりがい
割貝
1枚の貝片を割って、ひび割れを活かして使用する。



はぎだし
剥出
貝を貼って漆で塗り込めてから、ヘラや刃物で貝片を覆っている部分の漆を剥ぎ出す。



とぎだし
研出
貝を貼った後に、すべて漆で塗りこめてから、木炭や砥石などで平滑に研ぎだす技法。



ちようきんほりつけ
彫金貼付
肉彫した彫金金具を貼り付け、象嵌のように見せている。



ひらまきえ
平時絵
地付漆で模様を描き、金粉を蒔き付ける。乾いたのち漆を染み込ませ金粉を固着させ、磨き上げる。



ちんきん
沈金
漆を塗った面に沈金刀で線を彫り、彫った溝に漆を摺り込んで金箔を押し込み、金色の線で文様をあわらす。



はくせん
箔絵
漆で文様を描き、上から金箔などを貼る技法で、金色の面で文様が表現される。



とぎだしたかまきえ
研出高時絵
漆や金を塗り重ねては研ぐ工程を繰り返し立体感を持たせ重厚に仕上げる、最高級の時絵技法。



きりかね
切金
正方形、長方形などの幾何学形に裁断した薄い板金で模様を構成する技法。



なしじ
梨子地
ごく薄く伸ばした大き目の金粉等を撒き、透漆で塗り込む技法。梨の肌のように見えることから名付けられた。

視聴者・読者プレゼント提供

特別展「漆—徳川美術館珠玉の名品—」を、ぜひ御社媒体にてご紹介ください。画像を1点以上使用してご紹介いただいた場合、視聴者・読者プレゼントとして本展覧会の御招待チケット（非売品）を、1媒体5組10名様にご提供いたします。

本券で同期間開催の企画展「怪々奇々—鬼・妖怪・化け物—」も御覧いただけます。

お問い合わせ 取材は随時お受けいたします



徳川美術館
The Tokugawa Art Museum

〒461-0023 名古屋市東区徳川町1017
TEL: 052-935-6262 (10時～17時受付)
052-935-8222 (営業時間外受付)
FAX: 052-935-6261

[報道関係対応窓口] 徳川美術館 管理部

吉川 由紀 yuki@tokugawa.or.jp

竹内 大知 d.takeuchi@tokugawa.or.jp



特別展 漆—徳川美術館珠玉の名品—

広報画像申請書 使用期間：～2020年9月13日



No.1
牡丹菊文堆朱平食籠
明時代 15世紀
徳川美術館蔵



No.2
屈輪文犀皮食籠・盆
南宋時代 13世紀
徳川美術館蔵



No.3
屈輪文犀皮食籠（部分）
南宋時代 13世紀
徳川美術館蔵



No.4
黒漆地楼閣人物図螺鈿桃形食籠
明時代 15-16世紀
徳川美術館蔵



No.5
重要文化財
朱漆地花鳥七宝繫文密陀絵沈金大椀
琉球 16-17世紀
徳川美術館蔵



No.6
梨子地秋の野蒔絵手箱
鎌倉時代 13-14世紀
徳川美術館蔵



No.7
菊鷺文白密陀彫文庫
明時代 15世紀
徳川美術館蔵



No.8
朱塗秋草蒔絵椀
江戸時代 嘉永5年（1852）
徳川美術館蔵

使用媒体

放送日・発売日

プレゼント提供 希望する 希望しない

貴社名

ご担当者様

データ送付先アドレス

ご連絡先電話番号

[ご利用にあたっての注意事項]

- ・画像のご利用は本展覧会の紹介用途のみに限ります。
- ・部分アップのトリミングは可能ですが、色変更等の加工はご遠慮ください。
- ・二次利用不可です。
- ・画像には最低限「タイトル」と「所蔵」のクレジットを明記してください。
- ・内容確認のための校正原稿をお送りください。
- ・ご掲載誌、DVD等を1部「徳川美術館 管理部 広報宛」でお送りください。



〒461-0023 名古屋市東区徳川町 1017

TEL: 052-935-6262 (10時～17時受付)

052-935-8222 (営業時間外受付)

FAX: 052-935-6261

担当: 吉川 yuki@tokugawa.or.jp

竹内 d.takeuchi@tokugawa.or.jp